

江戸東京研究センター

【2025 年度 大学評価総評】

2025 年度自己点検・評価シート、2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書、2025 年度中期目標・年度目標達成状況報告書によれば、すべての評価項目において適切に計画が実行され、目標の達成が進んでいると評価できる。本センターで企画された3つのプロジェクトが外部財団から評価され、研究助成が採択された。また、外部財団のプロジェクト監修と教育講座の企画を実施した。このように、「文理複眼」という非常に特徴ある方法によって、積極的に外部財団と共同して成果を出し続けている。今後も国際化の流れの中で持続可能な地域研究の拠点としてユニークな学際研究を継続することで優れた実績をあげることが、大いに期待できるといえよう。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024 年度大学評価結果総評】(参考)

2024 年度自己点検・評価シート、2023 年度中期目標・年度目標達成状況報告書、2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書をみるかぎり、すべての評価項目において、適切な対策が練られ、コロナ後の状況を活用し、着実に目標充足が進展していることが確認できる。2022、2023 年度の活動について学外有識者から第三者評価を受けている。国際目標としての SDGs 達成期限が残り 7 年を割り、このままでは完全達成はほぼ不可能なことが明らかになっている。引き続き、長期的かつ歴史的な視野をもって、持続可能な都市の在り方を文明論的に再検討することが国際的に重要な課題である。国際的にみてもユニークなプロジェクトとしての江戸東京研究センターは、その課題に真正面から取り組むものであり、今後の活躍がますます期待されるものとなっていると言えよう。

【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

本センターは、2017 年度に文部科学省・私立大学研究ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」に採択されたことにより設置された。当初の研究期間である 5 年を経過し、新しい段階として、当センター独自の新たな江戸東京研究の可能性を継続して調査・研究し、単なる歴史だけでなく、これからの東京、そして日本の価値観の転換と行く先とを考える視点を見出すことを目標としている。その際、特定の分野だけ、文系だけ、理系だけではなく「文理複眼」で研究活動を行っていくことを掲げている。さらに江戸東京研究センターの第 2 フェーズとしてのグランドデザインを「記憶から創造へ - 過去を知り、近未来への道筋を示す」とし、歴史的な記憶や経験を近未来の東京の創造に活かすための研究活動を行うことを当面の課題としている。

2024 年度の最大の成果は、本センターの研究プロジェクトが三菱財団の人文科学大型連携研究助成（研究代表者：米家志乃布）に採択されたことである。研究計画では、本センターの主要な 3 つのプロジェクト（①地理情報システムと名所の景観、②都市表象史、③表象文化と近未来デザイン）の研究活動を中心に、研究終了の 2027 年度までに EToS 叢書の続編の刊行および全体成果としての江戸東京の地図作成・刊行を目指す。

(1) 改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

研究所（センター）内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。 《対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。》	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S（さらに改善した又は新たに取り組んだ）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
《内容》		

・本センターの3つのプロジェクトが三菱財団の第53回人文科学研究助成（大型連携研究助成）に採択された。<https://www.mitsubishi-zaidan.jp/support/list.html>

（2）改善・向上の取り組み（社会連携・社会貢献）

社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。 ＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S（さらに改善した又は新たに取り組んだ）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫ ・本センターが監修し、公益財団法人東京観光財団が募集・実施する「Tokyo Time Travel」を開始した。 https://www.tokyo-time-travel.com/ ・NHK文化センター青山教室「新・江戸東京研究 江戸文化編」「新・江戸東京研究 都市・建築編」の2つの講座を新たに企画した。 https://www.nhk-cul.co.jp/programs/program_1272061.html		

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

（1）自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

研究所（センター）における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。 ＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A（概ね従来通りである又は特に問題ない）
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		

III. 2024年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準		研究活動
中期目標		国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが協働することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。
年度目標		①2024年1月にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で江戸東京に関する国際シンポジウムを開催した。発表メンバーはその内容を2024年度中に英語の学術雑誌に投稿する。 ②2025年1月に法政大学で東京湾に関するシンポジウムを開催予定である。本年度は昨年の国際シンポジウムの英語論文の投稿と新たなテーマによる江戸東京に関わるシンポジウムの開催を中心に、江戸東京研究センターならではの「文理複眼」による研究活動を実施する。これらの成果を発信、アピールすることで、法政大学の基幹的研究機構のひとつであることを示す。
達成指標		①英語論文の投稿 ②「文理複眼」による東京湾シンポジウムの開催、の実現・実施を指標とする。
年度末報	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	①2024年1月11日～13日の3日間にわたり、「Public and private spaces in Tokyo and Venice: The role of local communities and values」と題する国際シンポジウムを、ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で開催した。その発表メンバーはイ

告		タリアの学術雑誌 Storia Urbana（査読あり）に英語論文による研究成果を投稿した。 ②2025 年 1 月 12 日に法政大学ゲート棟において、文系・理系の研究メンバーによる「海からみる江戸東京 - 東京湾の歴史・現在・未来」シンポジウムを開催した。以上、年度目標に掲げたとおり、当センターならではの研究活動を実施することができた。
	改善策	—
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。
年度目標		①NHK 青山カルチャーセンターにおける〈新・江戸東京研究〉連続講座への講師派遣 ②研究会・シンポジウムの一般公開 ③外濠市民塾の本格的な活動再開 ④東京ツアー事業の開始など多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実におこなう。
達成指標		年度目標の①～④において、江戸東京研究センター研究員による講義および研究会・シンポジウムの実施、市民活動や東京ツアー事業の再開・開始を指標とする。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	①NHK 青山カルチャーセンターの〈新・江戸東京研究〉講座に 12 名の講師を派遣した。 ②シンポジウム 4 本を一般公開し、多くの聴衆を得た。 ③外濠市民塾の活動が本格的に再開された。 ④本センター監修による東京観光財団の外国人向け東京ツアーが開始された。さらに⑤NHKBS における江戸文化に関する番組にセンターのメンバーが複数出演した。以上、一般社会への貢献、学術成果の還元を行うことができた。
	改善策	—
【重点目標】 当センターの特徴としての文理が協働して行う「文理複眼」による研究活動の推進を重点目標とする。		
【目標を達成するための施策等】 「文理複眼」による東京湾シンポジウムの開催を目標達成のための施策とする。		
【年度目標達成状況総括】 達成指標に示したように、すべての年度目標を十分に達成することができた。		

IV. 2025 年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが協働することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。
年度目標	2024 年度に採択された三菱財団の大型連携研究助成では、本センターのプロジェクトによる論文集の刊行と地図の作成を 2027 年度までの成果目標としている。そこで、①地図プロジェクトの創設および②2025 年度中に法政大学で東京の地誌に関するシンポジウムを開催予定である。本年度も江戸東京研究センターならではの「文理複眼」による研究活動を実施する。これらの成果を発信、アピールすることで、法政大学の基幹的研究機構のひとつであることを示す。

達成指標	「文理複眼」による ①地図プロジェクトの創設 ②東京の地誌に関するシンポジウムの開催、の実現・実施を指標とする。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。
年度目標	①NHK 青山カルチャーセンターにおける〈新・江戸東京研究〉講座への講師派遣 ②研究会・シンポジウムの一般公開 ③外濠市民塾の活動 ④東京ツアー事業の継続など多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実にこなう。
達成指標	年度目標の①～④において、江戸東京研究センター研究員による講義および研究会・シンポジウムの実施、市民活動や東京ツアー事業の実施を指標とする。
【重点目標】 当センターの特徴としての文理が協働して行う「文理複眼」による研究活動の推進を重点目標とする。 【目標を達成するための施策等】 「文理複眼」による地図プロジェクトの創設を目標達成のための施策とする。	